

八章 精神世界への旅

精神世界への旅

イスラム学の学者ルードルフ・ゲルプケ博士は、LSDとシロシンを自ら試し、その結果の報告に「精神世界への旅」という標題をつけた。この報告は年報『アンタイオス』（一九六二年一月号）に掲載され、以下に掲げるLSD体験の描写はそこから引用したものである。まず、この標題はその体験を如実に言い表しているといえる。つまり、内的な精神世界は外界と同じく広大無辺で神秘に満ちており、内界を旅する者は外的世界の旅人と同じようにそこに留まり続けることはできず、地上の日常意識の中に戻らなければならないからである。どちらの旅をするにも、最小限の危険で行え、本当に実り多い計画になるようにするために、十分な準備が必要である。

以下の報告では、LSDによって生み出される酩酊体験がどれほど多様なものが示されることにな

ろう。また、この多様な酩酊体験の選択に決定的な力を持っていたのは、こうした試みを行おうとした動機にある。ここで報告されているのは、まさに単なる好奇心からとか、珍しい嗜好品として用いたのではなく、あくまで実験を試みた人びとの報告である。つまり彼らは、内界と外界の体験を増し、薬という鍵の助けを借りて新しい「知覚の扉」(ウィリアム・ブレイク)を開き、あるいはゲルプケをして、その鍵によって内界と外界の比較の扉を開かしめ、空間と時間を征服することで、精神世界の中で新たな見通しと知見を得るための可能性を求めたのである。

以下に示された実験記録のうち初めの二つは、このルードルフ・ゲルプケの報告から抜粋したものである。

風の中での魂の踊り

(LSDを〇・〇七五ミリグラム服用、一九六一年六月二十三日十三時)

普通量のLSDを服用したあとで、私は同僚たちと共に、十四時頃まではしゃいでいた。その後、私はひとりでヴェルトミューラー書店(バーゼルの)に行ったが、そこでいよいよ薬の効果が現れ始めるのを感じた。そのことに気づいたのは次のような現象によってであった。一心不乱に棚の奥で探し回ってみつけた本の内容は、私にとってもはやどうでもよいようなことのように思えてき始め、逆に周囲の些細なものが突如としてはっきりと際立ち、何か「重要な」もののように見え始めたのであった。……それから一〇分もたったであろうか、知人の夫婦と出会ってしまい、私はどうして

も彼らと挨拶程度の会話を交わさなければならぬはめとなった。それはその時の私にとっていくらか苦痛に感じられるものであったが、しかしまったく不快というものではなかった。彼らの会話に（また私自身にも）耳を傾けたが、私自身は「まったくの遠き存在」のように思っていた。語られたこと（それは、私がかつて翻訳したペルシアの物語についてであったようだが）は、その時の私にはすでに、「別の世界に属する事柄」となっていた。もちろんその世界について、十分に語ることはできたかも知れない（なぜなら、つい今しがたまで、その世界の中に住んでいたし、その世界での「生き方のルール」さえも覚えているのだから！）が、しかしそれとはもはや感情的な関わりのない世界に私はいたのだ。もはや私にとって、彼らの世界に対して何の関心すらも持ち得なかったのである。しかしそのことを素振りに出す必要もないように思えた。

彼らに別れを告げるのに成功してから、私は市街を抜けて、さらに散歩がてら市場まで足を延ばしていた。まだ「幻覚」は現れず、すべてがいつものように見え、また聞こえもしたが、それでもすべてが言いようもなく変化していた。一足ごとに私自身がロボットのようになっていくのを感じた。特に、顔の筋肉が固く動かなくなっていくように感じた。顔がほとんど無表情になり、うつろになり、変化がなく、まるで仮面でもかぶっているように硬直しているのを感じた。それでも、歩いたり動いたりすることはできた。なぜなら、「以前に」歩いたり動いたりしていたこと、またどのようなようにそうした動作を行っていたかを私の体が覚えていたからである。しかし記憶が昔にさかのぼるにつれて、ますます私自身が不確かになっていくのを覚えた。自分の手が道路の上にあるかの

ようにさえ思われた。私は手をポケットにつっこんだり、振り回したり、背中で組み合わせてみたりしてみた。私は自分の手を、自分と一緒に引きずり回さなければならず、正しく配置することなどできないような、やっかい者のように扱った。私の体全体がまさしく同じような状態になっていた。私には、自分の体が何のためにあるのか、また、それと共にどこへ行こうとしているのかもはやわからなくなっていた。いろいろなやり方を決定するための分別が失われてしまったため、「以前の記憶」を唯一のたよりにしながら、苦勞の末にようやくそれを再現するということをしなければならなかった。このようにして、市場からわずかに離れた私の家にたどり着いたのは、十五時十分頃であった。

私はこれまでに一度も陶醉した気分になることはなかった。私が体験したのは、むしろ精神が次第に麻痺していく感覚であった。根源的に恐怖を感じることは何もなかった。しかし、ある種の精神病への移行段階——当然それはもっと大きな時間的間隔によって移行していくものであるが——では、これにとっても良く似た過程が進行しているのではないかと想像することができた。また、人間世界における以前の自分の存在の記憶がまだある限り、現実世界との関わりを失った患者でも、この世界の中に（多少とも）道を見出すことができるのではないかと想像してみたりした。しかし病気が進んで、記憶が不鮮明になり、ついには以前の記憶の手がかりを失ったとき、患者たちはすべての能力を喪失してしまうのかも知れない。

部屋に入って間もなく、「透明な重苦しさ」は消えていった。窓の一つに目を投げかけながら私

は腰をおろすと、魔法にでもかかったようにすぐに動けなくなってしまった。窓は大きく開け放たれ、すき通った紗のカーテンが代りに引かれていた。軽やかな風がこのカーテンとたわむれながら部屋へ入ってきた。また陽光はそよ風の中で息づくカーテンや、飾り縁の上の鉢植え植物や葉巻きひげに美しい影を作っていた。この光景は私をしっかりとつかんで離さなかった。私はその中に「心酔し」、植物の影が陽光と風の中で絶えず優雅に波打ちながら揺れ動くのをじっと見つめ続けていた。私には「それ」が何であるかは熟知しているはずなのに、その名前、形態、そしてそれに関わる「呪文」すらも思い出そうと努めていた。ついに私はそれを見つけたのである。「死の踊り」「魂の踊り」だ。それは、紗のカーテンの上で風と光が私に見せてくれたものであった。それは恐ろしかったか？ 不安を感じさせるものであったか？ おそらく——最初のうちはそうだった。けれども、次にはとても晴れやかな気分になって、静寂な音楽を聞き、救い出された影と一緒に私の魂も風の笛に合わせて踊ったのである。そうだ！ 私は初めて気づいた。その原因はカーテンにあり、まさにこのカーテンそのものが、それを覆い隠している最後の秘密なのだ。それでは、なぜそのカーテンを引き裂くのか？ そうする者は、自分自身を引き裂くことになるだけなのに。なぜなら、カーテンのうしろには「何もない」のだから……。

深淵からのクラゲ

(LSDを〇・一五〇ミリグラム、一九六一年四月十五日九時十五分)

約三〇分後にもう薬が効いてきて、内的な強い興奮、手のふるえ、皮膚の悪寒そして口の中に金属を触れた時の味覚が生じた。

十時

「部屋の周囲は青白く光る波に変わった。それは足元から体の方へと押し寄せてきた。皮膚——とりわけ足の指の——は電気を帯びたようにしびれた。絶え間なく押し寄せる昂りによって、私の明晰な思考の働きは妨げられる……」

十時二十分

「私は、現在の状態を言い表すことばが見つからない。それはまるで、「別の人間」、まったく見知らぬ人間が、私の所有物を一つひとつ取り去っていくようだ。書くのがどうしようもなく苦痛だ。「妨げられている」のか「解き放たれているのか」——私にはわからない！」

次第に自分が疎外されていく、この不快な過程は、私の中に無力感、（自分が何かに）引き渡されていくというどうしようもない感情を呼びおこした。十時三十分頃に、私は目を閉じた。すると絡み合っている無数の糸が赤い背景の上に見えてきた。鉛のように重たい空がすべての物の上のしかかっているようであった。私には、自分の自我が押しつぶされてしまったように感じられ、縮んだ小人のようにすら思えた。……十三時ちょっと前に、私は、この実験の仲間が作り出す、ますます圧迫となる雰囲気から逃れたいと願った。その中にいるとわれわれはお互いに、本当の酩酊状態になることが妨げられると思えたのである。私は何もない小さな部屋の中で、壁に背をもたせかけて床に座り、私の正面にあるたった一つの窓ごしに、灰白色の雲で覆われた空の一部を見

た。それは、私にとって絶望的な全宇宙のように一望された。私は意気阻喪し、自分自身が非常に醜く嫌悪すべき人間のように思えてきて、鏡を見ることも、また他人から顔をのぞき込まれることもとてもできそうになかった。（この日の実験では、そのような発作的衝動にかられたことが何度かあったのである。）このような酩酊状態が早く過ぎ去ることを、私は待ち望んでいた。しかし私の体は全的にその支配下におかれてしまっていた。そして執拗にのしかかってくるその重みを心の奥深くでたどることができた。何百というクラゲの腕によって、私の四肢を包み込むかのように陶酔が襲いかかってきた——そうだ！ 私は不思議なリズムで接触しながら電気刺激が与えられるのを、まさしく体験したのである。その接触は、むろん目にこそ見えないが、どこにでも実際にいるようなリアルな生き物によるもののように感じられた。私は大声でそれに話しかけ、ののしり、叫び、公然と闘いを挑んだ。……しかし反面、もう一方の叫びは、私自身を納得させていた。「それはおまえ自身の中にいる悪魔が投影されているにすぎないのだよ。それはおまえの魂という怪物なのさ。」

この叫びは剣のひらめきのように感じられた。私の中を鋭利な刃で突き刺すことによって、私を救済してくれた。（その瞬間に）クラゲの腕は切断されたように、私のまつわりから離れ落ち、しかも開かれた窓のうしろにあって、それまではどんよりと輝きを失っていた灰白色の空が、陽光に照らされた水面のように突然に輝き始めた。私は魔法にかけられたように身を緊張させて、その体験に身をゆだねていると、それは（私に対して！）本当の水のようになって襲いかかってきた。そ

れは地下から湧き出る泉のように思われた。その泉はかつて涸れてしまっていたが、今や私に向かって、こんこんと湧き出し、幾百万ものしずくによって、河、湖、大海になろうとしていた。しかも、そのしずくの一滴滴の上で光が躍っていた。部屋や窓や空が私の意識に戻ってきたとき（十三時二十五分）、もちろん酩酊状態は——まだ——終わっていなかったが、続く二時間の間に私のそばを通り過ぎたその名残りは、雷雨のあとの虹にも似て爽やかであった。

以上に描写されたように、LSD投与による二つの実験で、ゲルプケは外界と自分の体がよそらしいものになっていくこと、そしてまた見知らぬ存在である霊鬼が自分の体を占拠していくのを体験したが、その感覚はまさにLSD酩酊特有のものであるといえよう。このような特徴は、多くのLSD酩酊体験の実験記録において、必ずと言えるほど列挙されているものである。私自身が被験者となった最初の実験においても、その霊鬼に憑かれてしまった不快な体験が記録されている。その時私を強く襲ったものは不安と驚きであった。なぜなら、その霊鬼がLSDの生贄となった私を再び解放してくれるのだということ、その時はまだ知らなかったからである。

アオサギの踊り

アーヴィン・イエックレは装丁の凝った私家版『神託、夢、催眠状態における運命のルーネ文字』（注1）

の中で、LSDを自らに試みた貴重な記録を公けにした。この試みは一九六六年十二月二日に行われ、ルードルフ・ゲルプケがそれに立ち会い、その口述筆記を担当した。さらにその後で実験者が実験中の記憶にもとづいて説明をつけ加えた。

注1 Erwin Jaekle: *Schicksalsrune in Orakel, Traum und Trance*. Arben-Press, Arbon, 1969.

私は魔界に関わりを持つ人間として、当然のこととしてその実験を試みたのである。私はその試みを恐れてはいなかった。しかし、何の信念もなしにただ試みることは、予想しがたい悲惨な結果に至るであろうことを知っていたので、私自身の中に何か別の者が住みついているとしたら、それに出会ってみたいと考えていた。そこで、私は車の鍵を私の添人に渡し、私が持っている日本刀をしまっておいて欲しいと依頼した。(訳注 西欧では刀は魔力を断ち切る働きをすると信じられている。)

(LSDにより) 共有の世界の中に入って一時間後(実験開始後一時間)、やがて緊張がとけてくるにつれて疲労感が増してきた。声だけが変わってきた。それは雪景色の中での声のように、しわがれていて余韻がなく聞こえた。間もなくしてそれも消えていった。脈搏がいくらか多くなっていたが、実験後二時間でそれは六四回に戻った。私は自分の体が次第に軽くなっていき、ほとんど無重力の状態になっていくのを感じた。町の向こうの険しい山腹を苦もなく登れるような気がした。壁の間も実に軽々と歩いていけるような錯覚に陥っていた。部屋の隅とランプの下の影は煙のように青くかすんでいた。肉体は浮遊して重さがなく、体中に小さな孔がいっぱい空き、それがここ

とかあそこといったようにあるのではなく至る所に存在していて、もう体といえるものではなかった。方旗騎士の祭場(注2)はここここで息づき始めた。部屋のすべての対象が息づいていた。私が故意に目を投げかけると、その対象は視野の中では平凡で特別の関わりもないもののようになってしまうが、しかしそれぞれは、波間を動き、波をすべて呑み込んでしまうほど「大きな」息をした。色彩が花開くように忽然と現れて、より親しみ深く、より彩やかなものとなり、石棺の大きな壁画のように空間を占拠していった。その彩やかな色を楽しもうと思えばそれもできたであろう。しかし私にはそのような気すらおきなかった。私は疲れ切っていて、積極的に行動をおこす氣力を失っていた。あらゆる恐れが私のごまかしを咎めるかのように感じられた。私はただ自分自身に謙虚に、あらゆることを受託するままにいたいと欲した。——そうなのだ——私の意識は次のことを私に示してくれていた。優れた哲学の折句(訳注 詩形の一つで、各行の初めの文字を集めるとことばになるもの)の文字がすべての対象にも内在しているのだから、それを見つけたして、統一のとれた一つの世界を、多くの詩の中で、いやすべての中で作り上げなければならぬということであった。私はそのことを愛情深く、しかも義務感として体験することにした。私は今までにそのような考えに至ったことはないように思った。しかし、「雄弁と沈黙の小さな学校」というドイツの格言をヒントとして、最近ラテン語の折句で私が表現したあの格言——最高の愛は愛そのものである amor maximus amor rei est——の意味はそうした体験のものであった。私は添人にそのことを告げ、それを書きとつてくれるように頼んだ。なぜなら、彼にも同じような思考に参加してほしかったから

だ。彼も世界の折句を思いだし、このゲームに参加した。私は彼に文字を投げかけた。彼はそれを完成しなければならなかった。そうすることで私の中に徐々に湧き上がってくる憎しみが解消するのだ。いや少なくとも憎しみが緩和されるのだ。私の体験は果てしなかった。実験のこの段階に至って、私は正確な自分のことばを探そうと努めた。しかし正確なことばを見つけないことができず、あたかも正確なことばが脳裡から消え去ってしまったようであり、ただ不正確な意味にならないことばのみが飛び出していた。私は実験中の体験を標準ドイツ語でしか表すことができなかった。したがって「実験の」間中、ずっと私は文章語で話した。私は自らの発見を自ら評価していた。もし定義づけに失敗したような場合は、私はすっかり失望してしまいか、あるいは初めから何度も情熱的に、悪漢と共に部屋の隅を駆け回りながら、大声で笑ったりしてみた。すなわち、私には自分自身の失敗を知っておりながら、それを正確なことばにはできなかつたからだ。少なくともこの笑いは、自分の判断を了解していることを示すものであつた。この了解はまったく無欲のものであつた。それとは逆に、むしろ何も知らない方が了解していることにより近づくことができたのかも知れない。ともかく、意志が判断を暗くしているのだ。むしろ意志のないときに判断は明晰となるのだ。私は急に、ことばを「探そうという」気持そのものが、意志のない状態と矛盾しているようだと気づき始めた。したがって探し出されたことばは、どんな意志の力をも免れていたのだ。そのことばはただそこに存在するだけであつて、作用すべきものではなかつたのだ。陶醉しているからというのではなく、すべては精神力をはっきりと自ら確認すべきだったのである。精神力は脳にではなく、むしろ

ろ小さな孔の中にあつたのだ。ここに至って私は初めて、多くの、いやすべての詩の中で世界の折句は成り立っているのだということを知った。ここに至ってもなお、私はこれから先もことばを求めて終りのない旅を続けるだろうと予感していた。しかしそれはもはや他人へのためのことばではなく、自分自身ただひとりへの愛のためのものでしかないのかも知れない。これから先のあらゆる時にも、自分の力を信頼しなければならぬだろうし、そのために腹腔の神経が痛みだすだろう。そう考えると、事実、苦しみを感じ始めた。しかし私は横にはならなかった。むしろ本当に休息できるところを探ることができなかつたのであり、自らの手で横腹の素肌を確かめ、手の平に触れて喜び、指でそのものを理解し、鋭敏になつた感覚で素肌そのものを作りあげていった。

注2 シュタイン・アム・ラインにある「黒いチューリップに」(Zur schwarzen Tulpe) という古い館の部屋。ここで実験が行われた。

それからしばらくして、蜜のような金色をした格天井に忽然としてアオサギが現れた。それはかすかに揺れる花のようであつた。数は二羽だつた。一羽は私の方に目を向けて見つめていた。私もしっかりとその一羽に視線を投げかけた。突然木の太枝が視線を遮るように間を通り過ぎたが、まなざしはそのまま動かなかった。アオサギは花のような舞いで何かを語りかけているかのようにであつた。しかし声は聞こえなかつた。私にはアオサギの語りかけがわかるような氣になつた。そこには先程のあらゆる了解があつた。アオサギは、とうとうと流れる世界のリズムの中に息づき、藻のよりにゆつたりと揺れ動きながら、その中にひき込まれていった。私はアオサギに微笑みかけなが

ら、添人に対して、私はその影の存在を知っているというようなことを言い、それをいつまでも見
つめながらまばたきをした。一体何の存在なのかね？ という質問が返ってきたようであったが、
私はそれに「答える」必要はないと感じていたので、そのままに沈黙していた。ただそこでは了解
だけが意味があるように思えた。アオサギとの了解、その高々と伸ばした口ばしの、最も先の部分
で、二羽が触れ合っていた。やがて再び、添人の静かで同情するような問いかけのことばが投げか
けられ、私はそれをも了解をできるようになっていたし、もしもその声が私に近づいてきたなら、
おそらく私はその中に包み込まれていったであろう。了解が進むにつれて、木の天井の金色がまさ
に輝き始め、しかも崇高な光に覆われていった。やがて光が崩れ落ちると、部屋は再び不調和で冷
たく沈んでいったが、私はやがて再び明るくなることを心待ちしていた。再び天井に花開き、それ
を形容するために探していたことばがわかったような気になった。しかし今、ここでそのことばが
何であったか、もう思い出すことができない。鼓動、呼吸、視野の中にある対象の呼吸の中での大
きなリズム以外には何も思い出すことができない。あらゆる韻律に逆らうようなものとして、
そのリズムを定義する以外に何の表現もすることができないのだ。石棺のフレスコ画から、色彩だ
けが輝きながら幾度となく空間の中に飛び出し、再び絵の中に消え去っていくのであった。その色
彩だけは別の対象の実際の色とはまったく別種のものであった。その色彩には広がりがあった。そ
して縁が透明であった。やがて、どこまでも下り坂の道が忽然と現れた。それは平坦に続き、短い
登り坂が時々あったが、全体としてゆるやかな下りとなった。登り坂と下り坂は光を浴びて、

輝いたりあるいは影となっていた。突然、格天井が盛り上がり始めた。今や視界は丸天井によって遮られ、不思議にも私の下に横たわる球の中央と一体となって結びつき蜂の巣状となった。私自身の体重は光の渦と化し、重さを失っていった。

実験の初めるときに私は白い紙に目をやったが、それは朝靄のような青さであり、やがてそれは朝焼けの赤色に変わっていった。最後には紅紫色と化して以後はずっとその色が保たれていた。しかし今や世界は蜜のような金色に輝いていた。天井がまさに黄金のようであったが、黄金色そのものが天井であるわけではなかった。この輝きは地上のもののようにであり、まったく現代的なものだった。輝きは私の目の前に存在していた。

かくして、私は自ら降りることなく到着した。朝食のときも、午後も、また車でシャフハウゼンに行き、シュタイン・アム・ラインへ戻ったときも、私はまだ降りることを知らなかった。

昇るという体験と降りるという体験が、鏡映像のように繰り返されていた。さらに歩行者としての軽快さ、自由な呼吸、そして声のしわがれ具合すらも鏡映像の中のそれのようであった。しかし感覚だけは刺激されていた。それは長い間そうであったし、今もそうである。世界は別のもののようにになった。了解すること、その世界はいつそう多様なものとなった。世界はもう一つの広がりを持つようになった。その可変性は本物であった。

私は、今までにおびやかされるような危険が姿を現さないのに安堵した。私にとってこの世界は良き仲間だった。これからもそうあって欲しいと願った。実験によって、私は自分自身を十分に確

認することができたと思った。信頼、自由、そして心の余裕が与えられた。この世界から降りる際に私は、自分自身——つまり、より良き者——を連れて行き、自分がそれと今後一緒に生きるだろうことを密かに思いながら、それに微笑みかけた。なぜなら、私とそれとは共にそこにいたのだし、折句に絡み合わせられ、それを共に担ってきたのだから。そこで問題なのは意識の流れではなく、意識を満たすこと、世界の結合、われわれが属している一つの呼吸なのであった。それゆえ、物音は確かではっきりしていた。それは、その特別な現状の中に、遍在の確証を告げ知らせていた。色彩もまた同じであった。色彩は輝くと、それを満たす光を意味するのであって、色彩そのものを意味するのではなかった。音についてもまったく同様であった。両者（色と音）は一体であった。それはきわめて現代的な感覚に合っているようであった。したがって私は、再三にわたって——時間のない——無限の世界の中で現れる時間の経過を正確に知ることができたのだ。時間には果てしない歩みと同時に、広大な無限性があつた。だから私の思考もその無限性の中であちらこちらへと素早く跳び回ることができたのだ。しかしあちらこちらへと駆けめぐっているようであり、結局は核心へ思いをめぐらしていたのだ。だからその思考は私からいつまでも消え去ることなく今でも残っている。まったく気分よく実験が行われたのはすばらしいことであつた。私がこれほど心から笑つたことは今までに滅多にないことであつた。私が物と一体になっていると感じ、ことばもなく存在の中に自分を意識したときに、私はいつも笑つた。どの笑いも、その了解の中に哲学全体を含んでいるように思えた。それは折句の韻を踏み、妙なる笑いであつた。

アーヴィン・イエックレの実験報告を特徴づけているのは、LSDに遊ぶ大部分の者にとって、「言うに言われぬ」、「名状しがたい」ようなLSD体験の多くであり、作家であり詩人である彼は、それのことばによって捉えることに成功したのである。彼個人の哲学が、LSDによる映像の中に入りこんで、そこで目に見える形になって表れている。さらにこの実験は、実験者の人格によってLSD酩酊がどれほどはっきりした印象を残し得るかということを示したものである。

ある画家のLSD体験

今までとはまったく別のタイプのLSD体験としては、以下に示されるようなある画家による報告がある。彼は、LSD服用下での体験をどのように理解し、解釈したらよいのかについて迷い、それについて私から示唆を受けたいと望んで、私のもとを訪れた男である。つまりLSDの服用実験で生じた、彼の個人的な生活における深刻な変化は単なる幻覚のせいなのかということ、彼自身が訝っていた。生化学的な薬物であるLSDは幻覚を解発させるだけで、何ら新しいものを作り出すわけではなく、むしろこの幻覚は自分の内部から生じてくるものだと、私に説明すると、彼は彼自身の中に生じた変化の意味を理解したようであった。

……こうして私はエヴァと一緒に静かな谷間へ行った。その自然の中で、エヴァと一緒にたたず

むことで、谷間はさらに美しく見えるに違いないと私は思った。エヴァは若くて魅力的だった。彼女は二十歳であったのに、私はもう人生の半ばにあつた。私の奔放な性的遍歴の結果としてここまですってしまった悲劇的な体験であるにもかかわらず、しかも私を愛し、信じてくれた人びとに対して今までにむしろ苦痛や失望すら与えてき続けたにもかかわらず、私はエヴァの若さと彼女との冒険にいかんとも抗しきれない力で惹かれていったのである。私自身のすべてがすでにこの女性のものとなつてしまつていた。むろん私たちの関係は始まつたばかりだが、この魅惑的な力は前よりもはるかに強いものとなつていてることを感じていた。私はもはやどうにも抗しきれない状態にあつたのだ。私は人生において再び自分の家族と地位を捨て、あらゆる絆を断ち切る覚悟すらできていた。私は何にも妨げられずにエヴァと楽しい陶酔状態に身を任せたかつた。彼女は私にとって命であり、若さであつた。もう一度、さらにもう一度、快樂と命の杯を最後の一滴まで、死と墮落に至るまで飲み干すがよいという声が、私の中に聞こえ始めていた。それはまさしく悪魔に憑かれたようであつた。私はすでに久しい間、私の中から神も道德も追放してつたのだ。神とか道德というものは、信心深くて純真な多くの人びとを抑圧し食いものにするための、不信心で良心を失つた少数の人びとの作り物にすぎないと思つてつたからである。そしてこうした虚偽の社会道德とは、決して関わるまいと思つてつた。私は自らの意の向くままに、ただひたすら楽しめればよいと思つたようになつてつたのである——そして後はどうなろうと構わないのだ。「妻だらうと子どもだらうと、飢えたなら物乞いをさせればよいのだ。」私にとっては結婚制度さえも、社会的虚偽としか思えな

いのだ。私の両親の結婚生活、友人たちの結婚生活を見れば、そのことは歴然としている。人はいつでも一緒にいることで気が安まるから、そうしたままでこのことで、そのうちに彼らはそれに慣れてしまったにすぎない。だから「子どもがいないにこしたことはない。」人は、良い結婚という建前に縛られて、精神的に苦しむか、あるいは発疹や胃潰瘍になるか、それとも独自の道を歩むかのいずれかしかないのである。一生涯にわたってただ一人の妻を愛すべきであるという考えに対して、私の中ではあらゆる事柄が相克しているように思えるのである。私にとって、そのこと自体が反発を感じさせるものであり、自然に反することだとすら思われた。山あいの湖で過ごした、あの宿命的な夏の宵に私自身が感じた心の状態はそんなものだった。

夕刻の七時ちょうどだった。私たち二人は、かなり多量のLSD——約〇・一ミリグラム——を服用した。それから湖に沿って散策し、岸辺に腰をかけた。そして私たちは小石を投げ、水面に広がる波紋を見つめていた。やがて、いくばくかの心の動揺を感じ始めた。八時ごろ、私たちは酒場に入って、紅茶とハムパンを注文した。そこには数人の客がいて、冗談を言い合っては大声で笑っていた。彼らは時折、まばたきをしながら私たちの方を見た。彼らの目は異様に輝いているように思えた。私たちは自分が見慣れない遠い存在のように感じ、彼らが私たちに何かを見てとっているという感情を抱いた。外はゆっくりと暗くなっていった。私たちは重い腰をあげると、ホテルの部屋を探しに出かけることにした。黒々とした湖に沿って、街灯のない通りの辺鄙なところに宿屋があった。私がライターの火をつけると、花こう岩の階段が忽然と現れた。その階段を一歩ずつ上り

つめ、岸辺の通りからようやく宿屋に着いた。エヴァは不安におののいていた。「地獄のようだ。」私の頭にこんな思いがかすめた。と同時に、恐怖が私の体を走り、気分が悪くなり始めた。村の遠くで、九時を打つ鐘が聞こえた。

部屋に入るとすぐに、エヴァはベッドに身を投げて、大きく見開いた目で私を見つめた。その目には愛情の片鱗すら存在していなかった。私はベッドのへりに座り、両手でエヴァを抱いてやった。それから恐怖が私たちの上に襲いかかってきた。私たちは言いようもない深い戦慄に落ちていったが、それがいかなるものであるか、理解すらできない状態であった。

「私の目を見ろ」、「見つめて欲しい」、私はエヴァに心からそう願ったが、彼女のまなざしは何度となく私からそれてしまった。そして恐怖のあまり大声で叫び、体全体をふるわせていた。もはやどうしようもなかった。外はまっくらな闇と、黒々とした深い湖が広がっていた。宿屋の主人の家の明りはすでに消えて、人びとは眠りについたようだ。彼らはいったい何を訴えようとしているのか。おそらく警察でも呼びますよというのだろうか。そうされたら事態はますます悪くなるだろう。幻覚剤によるスキヤンダル——耐えがたく苦痛に満ちた考えが浮かんできた。

私たちはもうその場所から動くことができなかった。私たちが座っている周囲は木の壁に覆われていたが、その板の継ぎ目が恐ろしく輝いていた。突然に戸が開いて、「何か恐ろしいもの」が入ってきたように見えた。エヴァは狂ったように叫び声をあげて、ベッドの覆い布の下に身を隠した。そしてもう一度荒々しく叫んだ。覆い布の下の恐怖の方がさらにひどかったのだ。私の目をしっか

りと見つめて！——私は彼女に呼びかけたが、彼女は意識が沈みゆくかのように目をくるくると回っていた。彼女は完全に狂っているという考えが私をよぎった。私は懸命に彼女の髪をつかんで、私の顔の方へ向けた。私は彼女の目に恐ろしい恐怖をみてしまった。また、私たちの周囲のものはすべて、次の瞬間には私たちに襲いかかろうとしているかのように、敵対的で脅迫的に感じられた。おまえはエヴァを守って無事に朝まで切り抜けなければならぬ。そうすればやがて、薬の作用から逃れることができるだろう——私は自分にこう言い聞かせていた。しかしそれから私も、名状しがたい恐怖の中に再び落ちていったのである。この状態はもう決して終わらないかのように思われた。

部屋にあるすべての物はコミカルで、しかも生き生きとしていた。私の周囲のものはすべてあざ笑っていた。私は黄色と黒の縞模様をしたエヴァの靴を見たが、それは大きくてグロテスクなスズメバチが地面をはっているかのように見え、非常に刺激的に感じられた。洗面台の上に見える水道管は竜の頭となり、その目と二つの蛇口が悪意に満ちて私を見つめていた。私は、エヴァのために闘わなければならない騎士ゲオルグであると感じた。

エヴァの叫び声によって、私は考えることすら無理やりに奪われてしまった。彼女は私にしがみついた。私はのどの渴きを覚え、彼女もうめき声をあげていた。非常に緊張していたが、エヴァの手を離さないようにして、彼女に一杯の水を手渡そうとした。しかし、その水は粘り気があるように見え、糸をひいていて有毒であると思われたので、結局それで渴きをいやすことはできなかつた。

寢室のテーブルの上にある二つのランプは不思議な輝きを持ち、地獄の光のように輝いていた。時計が十二時を打った。

まさに地獄だ——私はそう思った。もちろんそこには悪魔も霊鬼も存在しない。それなのに、その存在が私たちの中に感じられ、空間を満たし、想像できないような恐怖で私たちを苦しめた。それは空想なのか、幻覚なのか、それとも影なのか？——現実に対しての、また私たちの体の中に潜んでいて、私たちを揺り動かす恐怖に対してのささやかな問いであった。そこには恐怖だけがあった。『知覚の扉』というハックスリーの本からの句がいくつか私の頭に浮かび、それによって私は束の間の慰めを得たようだった。私は、苦しみの中で恐れおののく生き物のようなエヴァの姿を見ると、後悔の念と憐れみをこの上なく感じた。私にとって、彼女は見ず知らずの存在のようにすら思っていた。そういえば、私は彼女のことをほとんど知らなかったのだ。彼女の首には、聖母マリアの形見入れがついた、金製のすばらしい鎖がかかっていた。それは彼女の弟からの贈り物であるというようなことを彼女はかつて言った。私は、慈愛に満ちた、心を安らかにしてくれる光輝がこの鎖から放たれているように感じた。この光輝は彼女の純粹な愛と結びついていて、しかしそのとき、私たちを決定的に葬り去るかのようになり、再び恐怖感が突然に襲いかかってきた。私は全力を尽くしてエヴァを守ってやらなければならなかった。ドアの外で電流計がカチカチと不快な音をたてているのが聞こえた。それはとてつもなく深刻なものであり、次の瞬間には私を亡きものにしようとする悪意に満ちた通告を私に伝えようとするかのようであった。すべての片隅や割れ目から、嘲

笑、嘲り、悪意が再び囁きかけてくるようであった。こうした責苦の真つただ中で、私は、えもいわれぬ希望に満ちた音楽を遠くに聞いた気がした。それは牝牛の首につけた鈴の音であった。しかし、その音は瞬間にやんで、私は再び、恐怖と驚愕の世界の中に突き落とされていった。溺れる人が藁にでもすがるように、先程の牝牛がもう一度家の近くまで来て鈴を鳴らしてくれることを願った。しかし、その後は何の音も聞こえず、カチカチ、ブンブンという電流計の脅迫的な音のみが、悪意に満ちた目に見えない虫のように、私たちのまわりを飛び回っているように聞こえた。

ようやくにして夜が白々と明けてきた。やがて落ち着きをとり戻し、私はよろい戸の割れ目が非常に明るくなったのに気づいた。私はエヴァをそのままに静かにしておこうと気遣った。彼女もようやく落ち着いていた。疲れきって彼女は目を閉じ、寝入っていた。ふと、私は悲しい気持が胸一杯にこみ上げてきて、よろめきながら、再びベッドのふちに腰を落とした。優越感と自己欺瞞は私の中から霧散してしまっていた。ただ憔悴だけが残っていた。私は鏡に自分の姿を映して愕然とした。一晩のうちに十歳も年をとってしまったのだった。打ちひしがれた私は、プラスチックの糸で編まれた不恰好な笠のついたテーブルランプの光の中で、硬直したように身動きひとつしなかった。急にランプの光が明るくなったように感じ、プラスチックの糸の中できらきらと輝き始めた。それはあらゆる色のダイヤモンドや宝石のように光りを放ち、私の中に至福感が圧倒し始めてきた。ランプも部屋も、そしてエヴァすらも忽然と消え去り、私ひとりが不可思議な幻想的風景の中にとくに気づいた。それはあたたかも巨大なゴチック風の教会堂の柱廊の内部にいるようであり、たくさ

んの柱と尖頭アーチがどこまでも続いていた。それらのすべては、石造りではなく水晶でできていた。それぞれの柱には、薄青色や黄色味を帯びたもの、あるいは乳白色や透明のものがあり、それらがまばらな林の木々のように私をとり囲んでいた。その尖頭アーチは、目もくらむほど高いところで消えていた。私の心の眼の中に明るい光が現れ、優しい声が光の中から漏れい^もでて、私に囁き始めた。私はその声を耳によってではなく、内に生ずる明瞭な思考であるかのごとくに聞き入っていた。

過ぎ去った夜半の恐怖の中で、私は自分自身のみの、つまりまったく個人的な体験をしたことを知った。自分だけのエゴイズムによって、人間の普遍的な世界を切断し、内的な孤立状態に陥っていたことを知った。私は自分の隣人たちを愛していたのではなく、私だけの喜び、そして彼らと与えてくれる喜びを愛していたのかも知れない。私の欲望を満足させるためだけに世界があったのかも知れない。私はかたくなで、冷淡で、嘲笑的だったのだ。それは地獄、我欲、冷酷を意味していたのだ。だから、私にはすべてのものが冷淡で、よそよそしく見え、嘲笑的で脅迫的にすら思えたのだ。とりとめもなく涙が流れ落ち、その中で私は、本当の愛とは自我への固執を断念することであり、熱望ではなく無私の愛が隣人の心に橋渡しをししてくれることを学んだ。言うに言われぬ幸福感の波が、私の体一杯におし寄せてくるようであった。私は神の慈悲に出会ったのだ。しかし、よりによって、この安っぽいランプの笠から、私はどうしてこのようなすばらしい啓示を受けるのだらう？——すると内なる声が聞こえてきた。神はすべてのものの中に内在するのだと。

山あいの湖での体験によって私は、東の間の物欲的世界の外に、朽ちることのないもう一つの精

神的現実界があり、それが私たちの本当の故郷なのだを確信するに至った。私は今、家路についている。

エヴァアにとっては、LSD体験のすべてがただの悪夢にすぎなかつたようである。私たちはその後まもなくして訣別した。

存在の喜ばしき歌

二十五歳の広告業者による以下の記録は、ウルシュタイン出版社刊の六二七番の本である、ジョン・キャッシュマン著『LSD——魔法の薬』に収められている。それを、このLSDに関する報告の中に採用させてもらうことにした。なぜなら、そこに記されているきわめて深い喜びと恐怖の幻想についての一連の報告は、死と再生の体験を如実に表現しており、多くのLSD実験の結果に特徴的に見られる現象だからである。

私が初めてLSDを体験したのは、私の支配人をしている友人の家でだった。仲間たちも良く知っていて、なごやかで打ちとけた雰囲気であった。私はLSDを二アンプル（二〇〇マイクログラム）口に入れ、コップに半分の水を飲んだ。薬の効き目は、土曜日の二十時から翌日の七時すこし前まで、ほぼ一一時間にわたって持続した。当然ながら私には、この薬の効き目を他の薬の効き目

と比較することはできない——しかし、私がそれによって見たり、体験した以上にすばらしいみごとな幻想や、超越的な至福の状態を見て体験した聖人は、今までにいないだろうと確信している。この奇跡を他人に生き生きと伝えるには私の才能は乏しく、この任務にはとても耐え得るものではない。すばらしいパレットを意のままにできる達人のみにしか対象をうまく描写し得ないとするならば、私は無味乾燥なスケッチで満足しなければならぬだろう。私の人生において最も印象深い体験を、ことばだけでしか表現できないという中途半端な試みをまず許してもらわなくてはならぬだろう。しかし他の人が私に対して、彼ら自身のすばらしい幻想を説明しようとして空しく試みるときに、私が見せる優越感の微笑は、共謀者の顔に表れる、何か知っているぞという共感の微笑に変わるだろう——共通の体験にはことばはいらないからである。

私がLSDを飲んでから最初に感じたのは、薬がほとんど効いていないというものだった。服用三〇分後には、最初の徴候——皮膚がチクチクする感覚——が現れると報告されていた。しかし皮膚への刺激感はずっと感じられなかった。私はそれに類似するいくつかの症状をすでに知っていたが、それらはほとんど現れないままであった。ともかく、私は何らかの症状が現れるのを静かに待つ以外に手立てはなかったのである。そこで私はラジオのダイヤルの光を見つめながら、そこから流れ出る、私の知らない流行歌のリズムに合わせて頭を振ったりしていた。それが数分間も続いたであろうか。やがて私は、そのダイヤルの照明が万華鏡のようにさまざまな色に変化していくのに気づいた。高音域では鮮やかな赤と黄の色調に、低音域では紫色やすみれ色へとさまざまな色調

に変化していた。私は笑った。色彩の変化がいつ始まったのかまったく気がつかなかったのだ。知っていることといえば、まさにそれがおこっていることだけだった。目を閉じてても多彩な色の変化は消えなかった。私は色彩がとても明るい照度を持っていることに圧倒されていた。私は今まさに見た光景について、誰かに説明することで、その揺れ動きながら輝く色彩をことばで表現してみたいという衝動にかられていた。しかし一方では、そんなことはあまり大したことでもないようにも思われた。私がそれを見つめている間、色彩は輝きながら部屋一杯にあふれ、音楽のリズムに合わせて何層にも重なっていった。色彩がまさに音楽であることに突然気づいたが、この発見は不意に思いついたのではなく、ずっと以前からすでに了解していたように思われた。また、今まで長い間、神聖なるものとしてみなされてきた概念が、忽然として取るに足らないつまらないもののようにも思われだした。私は色あざやかな音楽について何とかことばで表現したいと思ったが、一つとして適切なことばを思い浮かべることができずに、ただ単音節の語を繰り返すのみであった。しかも、その単語で表現されたときには、もはやその印象は光のような速さで私の意識から過ぎ去ってしまった。部屋は三つの方向に向かって運動しはじめ、絶えず変化していた。初めは揺れ動く菱形に形を変え、次には、誰かが部屋に空気でも入れたかのように、膨脹して楕円形になり、今にも壁が粉々に壊れそうであった。このような激しい変化の中で、私はどうにか対象に集中させていた。それらは溶解して陰うつな空虚になるか、あるいは融合して天に昇り行くかであり、私は特に高速度撮影のように繰り広げられる世界の小旅行に興味を持った。私は時計に注意を向けよう

としたが、針は私のまなざしを向けられることを避けるかのようにであった。私は時間を知りたいたいと思ったが、それすらできなかつた。私が聞いたもの、そして見たもの——つまり、晴れやかな協和音とたぐい稀な幻覚——にこの上なく魅せられてしまっていた。

私は圧倒されていた。この恍惚状態がどれほど長く続くか予想がつかなかつた。知っているのは、次に私の目の前に卵が忽然と現れたということであつた。

その卵——大きくて、しかも生き物のように鼓動しており、緑色に輝いていた——は、私がそれを発見する前からすでにそこにあつた。いや、私はそれがそこにあつたのだと「感じた」のだった。その卵は部屋のまん中で揺れ動いていた。私はその美しさに魅せられていたが、一方でそれが床に落ちて壊れてしまわないかと心配でならなかつた。しかし、この心配が終わらないうちに、卵は溶けて、代りに色とりどりの大きな花が一斉に咲いた。私は今までにこのようなすばらしい花を見たことがないと感じた。信じ難いほどしなやかな花卉が部屋の中に開き、とてもすばらしい色を四方八方にまき散らした。その色が私に媚びながら体を取り巻いてきたが、それは時に冷たく、時に暖かく感じられ、響くような口笛すら吹いているのが聞こえた。

花の芯がゆっくり花卉を食べつくしていくのを見てみると、やがて私自身の中に不安感が初めて湧き上がってくるのを感じた。花芯は黒々と輝いており、数知れない蟻の背がうごめいているように見えた。激しい苦しみを与えるかのように、彼らはゆっくりと花卉を食いつくしていったのである。私は、それを止めるか、あるいはもっと早く食いつくすように叫びたかつた。悪性の病気によ

って体が徐々に衰弱していくように、その美しい花卉が非常にゆっくりと消え失せていく光景を見るのは私にとって本当にしのび難い気持であった。この黒い物体はやがて私をも呑み込もうとしているのだということが、稲妻のように私の中でひらめき、愕然とした。私自身はいつの間にか花となり、這い回るこの異様な物体が私を食いつくそうとしているのだ！ 私は鋭い叫びを発した——それから以後のことは定かではなくなっていた。不安と嫌悪感が他の一切を排除してしまったのだ。「落ち着きなさい。そのままにして、逆らわないように。」と支配人が言ったのが聞こえた。私はその忠告に従おうとしたが、この黒々とした異様な物体は私に敵意を持って襲いかかってきて、私は思わず叫んだ。「もうだめだ！ お願いだから助けてくれ！」その瞬間、次のような声によって私は慰められ、ようやく落ち着きを取り戻した。「そのままにしておきなさい。怖くはありませんよ。そのままにして逆らわないように。」

私は、この驚くべき幻影のただ中に溶け込んでいってしまうのではないかと感じた。まさに私の体は波の中に呑み込まれ、この黒々とした物体の本質と一体化していたのだ。そして私の魂は、自我、生、いや死からも解放されたのだ。水晶のように透明な一瞬によって、私は自分が死ぬことがあるはずがないと悟った。「私は死んでいるのか？」と尋ねてみたが、この問いにはまったく意味がなかった。突然に、輝きを放つ光と、ほのかに光る調和の美しさがあった。この光によって、つまり名状しがたいほどに澄んだ白い光によって、すべては満たされていたのだ。私は死を経て、生まれ変わったのだ。それは純粹で聖なる恍惚境だった。生きていることの喜ばしき歌を聞いて、

私の肺は張り裂けそうになっていた。それは調和であり、生命そのものであった。そして、私という存在を満たしている聖なる愛は限りないものであった。私の意識は鋭く、一切を包括していた。私は神と悪魔と、あらゆる聖人を見た。そして真理を知った。私は何の困難も束縛もなく一切の中に飛び込んでいき、この世ならぬ幻影の至福の輝きの中で自由に水を浴びているように感じたのであった。

私は大声をはりあげて、不思議な新しい生と感情と現象の歌をうたいたかった。私は知らなければならぬこと、理解しなければならぬことのすべてを知り、理解できたと思った。私は不死身であり、全知全能の神よりも賢く、しかもいかなる愛にもまさる愛を持つことができたと思った。私の体と魂の最も小さな単位に至るまで、神を見、神を感じていた。世界は暖かさや慈愛に満ちていた。そこには時間も、空間も、そして自我すらもなかった。あるのはただ全宇宙の調和のみであった。すべてが白い光の中にあった。私という存在のどの糸をたどっても、その中にたどりつくであろうことを知ったのである。

私はこの明りを自分の中にたぐり寄せることで、絶えずそこに没入することができた。やがてそれが色褪せ始めたとき、私はそれを確実に捉えておきたいと強く願ったし、空間や時間といった現実が侵入してくることに激しく抵抗した。われわれの存在には限界があるという事実は、もはや私には受け入れることができなくなっていた。私は最後の真実を見てしまったので、それに対抗できるものは他に何も無いと思うようになっていた。時間、記録帳、ささやかな怒りなどといったもの

が支配する世界に私がゆっくりと戻りつつある間、この自分だけの旅、自分だけが知ったこと、自分だけが体験した驚き、美しさ、その他諸々のことについて報告しなければならぬと決意した。私は狂人のように支離滅裂な行動をしなければならなかった。私の考えは猛烈な速さで回転し始め、ことばはそれに歩調を合わせることはできなかつたからだ。私の支配人は笑いながら、わかつた、わかつたよと言つた。

以上、ここに選り出した「精神世界への旅」の報告は、きわめて多様な体験を収めたはずだが、それでもなお、LSDによつてひきおこされるすべての反応レベルを皆、完全な像として描くことに成功したとは言えない。そうした反応は、精神的、宗教的、神秘的な至高の体験から、荒々しい心身障害に至るまで種々様々であるからである。一方、LSD会議で次のような事例も報告されている。その事例には、ここで報告されたような幻覚や視覚的体験を刺激するといったものが一切なく、LSD服用実験中に被験者は、ただ身体的、精神的にきわめて不快な状態に長い間置かれたり、あるいはひどい病気にかかつているという感じを持つのみであるという報告である。

また一方、LSDの作用下での性的体験への影響についての報告もなされている。すべての感覚を刺激するのがLSD作用の本質的特徴であり、当然のことながら、性交時の酩酊は性感を予想外に昂進する可能性があることは確かである。しかしまた、LSDを服用したために、予想通りの性的パラダイスに至るところか、逆に煉獄の苦しみとか、それぞれの感覚麻痺の結果生じる地獄や死の空虚にまで行き

つくといった事例すらも報告されているのである。

薬物によって、このように多様で矛盾した反応がみられるのは、LSDとそれに類した幻覚剤の場合のみである。その理由として、ヒトの精神的な深層構造は複雑多様であり、LSD類だけがその深部にまで作用し、それを体験として表現できる効能を有しているからではないかと考えられる。